



新しい年の始まり

明けましておめでとうございます。健康で平安で希望に満ちた平成18年でありますように。また、お互いにそうした年にしたいものと思います。

12月31日から一夜明けただけなのに、1月1日は、特に正月元旦と呼ばれ、皆が挙って普段とは違った新鮮な気分を味わうのは、どうしてでしょう。

除夜の鐘をつき、初詣をして、初日の出を拝む、家族が集まってお屠蘇を頂き、お雑煮を食べる、そうした行いが、きっと私たちの生活に一つのリズムを与えているからでしょう。もし、そのようなリズムがなかったとしたら、私たちの日常生活は、随分と殺風景なものになっていたことに違いありません。

どんなに合理主義者であったとしても、365日がモノトーンの皆同じ毎日になった方がいいなどと思っている人はおりますまい。

それとも、逆な見方も成り立つように思います。人間は、ほぼ同じ事を繰り返す日常生活にばかり身をおくことには耐え切れず、生活にある種のリズムが必要と感ずるからこそ、先人たちは、変化に富んださまざまな美しい行事を創造し、流れゆく時間のそこそこに、そうした営みをリズムカルに配置したのかも知れません。

お正月を迎えるごとに、私たちは、誰にいわれるまでもなく、ふと立ち止まり、過ぎ去った年の出来事やそれまでの自分の歩みを振り返ります。また、誰にいわれるまでもなく、思い出を心にしまい、失敗は繰り返すまい、成功は明日につなげようと、抱負を心に浮かべます。お正月という慣習は、決して難しい道徳でも、厳めしい倫理でもなく、自然に人の心の中に過去への反省と未来への計画を呼び起こします。そう考えて見ると、お正月には、楽しさばかりでなく、どこかに落ち着きと静けさが漂う雰囲気があってほしいものと思います。

時間は、時計で計るような、決して無色透明の無機的な連続的流ればかりではない、そこには明暗があり、濃淡があり、抑揚がある、強いていうなら非連続性を内に含む有機的な流れであることに思い当たります。

時間を表す英語に「エポック」や「ピリオド」という単語がありますが、共に「中断」や「停止」、あるいは「循環して完結するもの」を意味するギリシア語を語源としています。ということは、あの西洋文化の源流を創造したギリシア人が時間というものを単純な直線的な一元的流れとしてではなく、しばし立ち止まったり、思いめぐらしたり、ある纏まりをつけながら歩みを進める、立体的な厚みをもった、豊饒な時の流れと考えていたことの標をそこに読み取ることも出来るでしょう。

四季の変化に富む風土に自らの歴史を刻んできた日本人は、殊の外時間の流れに敏感な

民族であるようにも感じますが、いや、日本人ばかりの心意識ガミユートともいい切れない、西洋人の心にも、そこに共通の心理を垣間見ることが出来るように思います。待降節アドベントのシーズンに入る頃、スーパーマーケットの軒先にはたくさんのクリスマスリース、モミやヒノキの青葉がうず高く積まれ、人々は、これを買って求め、家路を急ぎますが、それは、生命の息吹きを表す青葉を家に飾り、邪気を祓い、健康や平安や希望を祈る、日本の松飾りと全く同じ思いに基づく人類普遍の美風とっていいでしょう。

誰もが新しい年をハッピー・イヤーにしたいものと願うことは、人類発生以来今に伝わる素朴な願い、そして私たち現代人の変わらない真剣な願いなのです。

[>前のページへ戻る](#)